

男女共同参画週間記念事業

体験者が語る

防災・復興に「女性の視点」 が必要なワケ

～女性の視点から災害を考える～

6月9日(土)

講師 正井 礼子さん

阪神・淡路大震災を体験した講師が、東日本大震災で被災した東北沿岸部に入り見聞きしてきたことを交え、女性の視点から災害時や防災・復興において「何が変わり、何が変わっていないかったか」について話されました。



熱心に聞き入る参加者

報道されなかった女性たちのこと

阪神・淡路大震災の際に、女性たちについてはほとんど報道がありませんでした。そこで、被害の状況やどんな困難を感じているかインタビューし、記事を送ってもらい集めた声を『女性たちが語る阪神・淡路大震災』にまとめました。同時に、週3日の電話相談を開設。電話相談では夫からの暴力に関するDV相談が6割を占め、なかには「皆さんが被災され大変ななかを、こんな家庭内のつま

正井礼子さんプロフィール

NPO法人 女性と子ども支援センター「ウィメンズネット・こうべ」代表理事、神戸学院大学客員教授、三木市男女共同参画センター女性問題相談員

1992年「ウィメンズネット・こうべ」を発足。男女共同参画社会の実現と女性の人権を守るため、さまざまな活動を行う。

震災直後「女性支援ネットワーク」を立ち上げ、物資の配布や「女性のための電話相談」を開設。女性だけで語り合う「女性支援連続セミナー」「乳幼児を連れのお母さんの集い」などを毎月開催し、被災女性の支援を行った。震災以降は主に「女性に対する暴力」の根絶、特にDV被害者支援に力を注ぎ、付き添い支援など先駆的な取り組みを行っている。

《ウィメンズネット・こうべ
編集・翻訳発行の主な出版物》

『女たちが語る阪神・淡路大震災』
木馬書館

『災害と女性』
ウィメンズネット・こうべ

『被災地における性暴力』
NPO法人 女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ

らないもめごとを相談する私にはわがままでしょうか」と泣きながらの訴えもありました。

大地震があったサンフランシスコでは「震災がどれだけ女性に対する暴力に影響を及ぼしたか」という報告書が作成され、災害状況下で起こる家庭内暴力を、「仕方ない・つまらないこと」であると女性が考えないよう、日ごろから教育することが大切であると提言しています。

避難所の状況

阪神・淡路大震災の際に女性たちは着替え室もなく毛布やバスタオルに包まって着替え、その時じつと見つめる視線があったこと等は今でも何かの時に蘇るそうです。

16年後、東日本大震災で着替え室を設けた避難所は25%。依然として、衝突のない所さえありません。災害対策本部も避難所運営も全員男性の

ところがほとんどで、女性に対する暴力防止について話そうとしても聞いてもらえませんでした。

避難所運営には女性の視点が重要

着替え室や授乳室、乳幼児のいる家族の部屋、避難所での食事作り、支援物資の配布方法など避難所の運営に女性の視点がないと、安心した生活ができません。乳幼児を連れた母親や、認知症のお年寄りをかかえた家族は迷惑をかけるからと避難所に入ることを遠慮し、半壊の自宅等に戻られた例も多いそうです。

災害時に増える子どもへの虐待

阪神・淡路大震災の際、男性は会社優先で仕事に行き、残された女性たちは、余震が頻発するなか聞き分けなく走り回る子どもをひとり相手にせざるを得ませんでした。パニックを起こし、気が付いたら子供の

虐待につながっていたと泣きながら話された方もいました。

日ごろから準備しておくことが大切

災害時に女性の視点を活かすためには女性たちが日頃から話し合い、考えておくことが重要です。例えば、女性への暴力防止対策をマニュアル化する、避難所のリーダーの数も女性は何割等具体的に示す。また、トイレは、男女別々に離れた場所に設置し明るくすること。暗いトイレの周りでは性犯罪が起きやすく、実際に起きています。

防災や復興対策に女性の参画を！

東日本大震災では、女性の悩みや暴力についての相談窓口が開設され、女性の意見を反映した避難所運営等について、女性団体や内閣府男女共同参画局からの働きかけがありました。

女性たちが、これからの防災や復興対策など意思決定の場にどれだけ参画できるかが重要です。清瀬市でも、さまざまなニーズに配慮したきめ細かな防災や復興対策が作られるよう願っています。

災害が起こった時には、女性の視点の取り組みが欠かせないこと、日ごろから取り組んでおくことの大切さを学びました。

(里澤)